する鷹揚なすがた、八月一日に白無垢を着る年中行事を金鷄鳥と鷺、鷹匠の手にとまつて居る鷹までがじろりと見る、まさに沈魚落雁、來てくれたかと世辭のひとつもいはぬ見識、いづれもこの醜業婦に對する頌讃の辭だ、貶なしても「智惠まん〳〵」或は「慾氣を去れば、わが心」まさに王侯英雄の待遇而して其狎客たる遊冶郎に對しては、

醜業婦を待つに王侯英雄を以てす

來た顏はふみのうらみの十分一
ゆいごんをそろり〳〵と舟にのせ
草も木も寢るにまだ來ぬ初會の夜
上草履ばた〳〵と外へ行く
大門を出ると思案に蹴つまづき
なまもてのやつがかむろにくらはされ
待ちなんし羽織のゑりが馬鹿らしい
おらがやつなんと云つたとつれに聞き
ふられたを舟宿なだめ〳〵來る
桶ぶせと入れかへにする座敷牢
飲むとこがあると燈籠に見得を云ひ
吉原へはじめて伺候つかまつり
野暮にして居ることだよと通なやつ
素一歩の心ぼそくもたゞ一騎
ひらりのる猪牙はもとでの入つたやつ
見くびつてやり手つらをも持つて來ず
朝歸り行く時ほどの智惠は出ず
朝歸ぬす人ほどに工夫をし

いたゞいてのむを傾城わきをむき
ほとゝぎす土手でと口がついすべり
もてぬやつ船宿へ來てわりをいふ
やぼなやつふられたことをひしかくし
よく〳〵のりつぶく客はたれて置き

きりやうのわるさ、男ぶりのみちめさ

歸らうとする、所謂きぬ〴〵の別れに「羽織のゑり」を折つてくれるか「かむろ」が代りにたゝいてくれるかに滿足して、吉原通ひの猪牙船に身を輕く乘り込むこと「野暮にして居ること」が女郎買のコツだと得意になる馬鹿はまだよい方で、他は悉く馬鹿の馬鹿に詠まれて居る、げつしていたゞかぬ女郎の前で、いたゞいてのんで女郎にわきを向かるゝきりやうのわるさ、「ほとゝぎす」を聞いたよ、と風雅めいた言譯をして、どこで、ときかれ「土手で」とウツカリ云つて、露

現して狼狽へる男ぶりのみちめさ、「素一歩」の悄然たる、舟宿で「ふられた」ふんがいをして「慰さめられて居たり、「吉原へはじめて伺候」つかまつたり、「りつぶく」して夜具にきたないものをのこすに至つては沙汰の限りと云はざるを得んやである、さうしてその客なる男の妻たる者に對して川柳作者ちつとも同情が無い、

女房の威有つてたけき朝歸り
女房は淺艸餅をとつて投げ
土手の眞ン中で去り狀くれろなり
どんなのへ行くえと内儀きゝたがり
女房がやくほど亭主もてもせず
あの義理のこの義理のとて出られやす
女房の異見一歩が薪を積み

傾城に女房面談する氣なり
女房のへゝんと笑ふツレが來て
朝歸り下女がことまでがなり出し
女房の理くつ吉原みぢん也
うちに無いものでもなしと女房云ひ
女房をたいせつにするみぐるしさ

私は昔の江戸ッ兒になりたくない

遊ぶだけの錢で薪を買つたら山ほど積めます、と云ふ一方に小判をいたゞかぬ女郎を對照させるなど、むかしみるを酢で食はう、蛤を燒いて食はう、と云つたかくし女の役を女房にふりつけて居る、女郎は姫君、女房ははしたと云つたやうな詠み方だ、この時代の吉原崇拜は、到底今日から想像は出來ない、上に田沼の惡政あり、下にこの市民の遊蕩あり、いかにのんきでいゝにしても、私は昔の江戸ッ兒になりたくない、と聊か野暮を云ひたくなる、藝術は人格のあらはれで無くてはいけない、然らば昔の川柳といふもの、何と云つて可いであらうか、乍併

更け渡る廊下をやり手のつさ〳〵
どの嘘がほんの夫婦にならうやら
片しぐれ茶屋の異見も聞く夜なり
比翼莫蓙あちら向く夜の名では無し
月もはや影傾きて朝歸り
燈籠見に夫婦と現じ來りけり
分散の先づ金高は女房なり
素見物秋の末よりぶらつかず
衣紋阪夜は一人明け二人明け

りつぱな藝術的廓吟

などは、りつぱに詩であり、藝術である、古川柳文學に非ず、とうつかりの斷言も出來ない、「燈籠見」「分散」落藉された娼妓の、しみ〴〵迫る或哀愁のやうなものを巧みに描き出す、「片しぐれ」「月もはや」當時の江戸座でも雪門でも、俳句はこれまでに進んで居なかつた、それからこの時代の江戸市民が、僅かばかりの階級の咀ひが……武士に對する反抗が……僅かに遊里吟に於てあらはれて居るのは痛快だ。

人は武士なぜ町人に爲つて來る
人は武士なぜ傾城にいやがられ
人は武士正九ッに女郎買
ものゝふはすはるとスグに時を聞き
日ぐらしがにくうざんすと淺黄もて
樂しんで淫せず歸る淺黄裏
武士たるものを背中にてあいしらひ
やり手婆武士たるものをにがわらひ

これぱかりは今日に移せない、軍人のサーベルではさむらひの大小(双刀)ほどに威光が無い、武士の關係に町人が、遊里に於て一斗の氣を吐いたのである、女犯を戒められた僧が、其圓顱を利用し、所謂中宿へ來て僧衣を脱し、着流しに脇差(小刀)をさし、醫者を粧ひ(昔の醫師は圓顱)女郎買をした。

中宿でころもを返し與ふれば
愚僧化して醫者に成る面白さ

もつとも、いかに腐敗して居たとて、さう吉原ばかり讃嘆しては居ない、風壞の人情本にさへ勸善懲惡を云ひたがる時代だから

孝不孝二ツならべる塗枕

死すべき時に死せざれば日本橋

といふやうな教訓めいたのもある、吉原の心中未遂は、日本橋でさらされた揚句、人づきあひのならぬ賤民の巷へ落されたのだ。

鄙吟に教訓川柳

吉原の外、品川其他江戸の周圍にも四宿あり、また切見世と稱する賣淫窟あり、道中遊女には中仙道の輕井澤、而して九州の長崎丸山に至つては、是れ當年唯一の外國人相手の遊廓として、川柳の材料に爲つて居る、しかも其作者は其地方の人で無く、滅多に江戸の地を離れない江戸兒だつたらしいのだ。

品川は波うちぎわへ床をとり

品川の衣桁もゝひきなどもかけ

入船を見なと初會のやつに云ひ

いふことが無さに初會は海をほめ

切見世は青大將のにほひがし

にはとりのやうに切見世忙がしい

切見世はつき出すやうにいとま乞

おしろいを霜と見らるゝはづかしさ

四十から老には入らぬ吉田町

およんねんしと材木がものを云ひ

ぞつとする淫賣窟の句

「入船」は品川の妓樓、今もその面影をのこし、「切見世」の數句、せつ〳〵として哀愁身にしまる心地がする、「おしろい」と「およんねんし」は一讀して肌に粟を生ずる、本所吉田町には、むかし小賣淫窟があつたと云ふ。

わり床に戸板など出す輕井澤

馬を買ふ程でうけ出す輕井澤

そこまめで居つゞけをする輕井澤

早乙女をすゝいでは出す輕井澤

輕井澤、今は避暑地、別莊地、昔は碓氷峠の登り口、往來必ず一と休みするところ、また旅客の一行事だつたらう、但しこれ等の句は、いづれも實地に臨んでの句では無いらしい、誇張もあれば旁批もある、長崎遊里の句はちよつとちがつた味がする。

丸山の客は一萬三千里

丸山の客は一萬三千里

惚れたのを通辭一人が可笑しがり

丸山でとるむなぐらはぼたんかけ

「一萬三千里」は和蘭からの遠客を云つたので、有名な句だ、他二首も當時の人が當時の外客を見た氣持をあらはして居る。

こゝに江戸にも一種不倫の魔窟が有つた、室町戰國以來の風俗で、蔭間と稱する男色の賣淫で、江戸の芳町がそれである。

よし町はふみと手紙の間を書き

振袖をちやくして後家のあいて也

背に腹をかへてよし町客をとり

よつぽどのたはけかげ間をつれて逃げ

男性の變態性と、女性の性餓鬼を共に其狎客とした男娼(かげ間)に江戸時代の風紀紊亂が想見される。

芝居も亦た川柳人に好材料を與へることに於て、遊廓に次ぐものだつた。

三浦右衞門一段高く無理を云ひ

三浦右衞門北野へ向かぬ役者なり

芝居川柳の特色

白面青隈、黄金冠を戴く時平役者で有名な中島三甫右衞門である。

女形王子を出でゝ遠からず

いつそもう路考が出るといつそもう

百姓の作り上げたる菊之丞

當時女形俳優として江戸を騒がした王子路考、二代目瀬戸菊之丞を詠んだ句だ、隱退した四世市川團十郎の深川隱宅をながめて

親玉の家はあれさと釣つて居る

反吐をつくやうな菊五郎

元祖尾上菊五郎のこうせき(聲色)を

梅幸の聲反吐つくにさも似たり

菊五郎舌の廻らぬ假名があり

などゝ詠んだのは、句としては論ぜず、其人間を今に見るやうだ、その他その頃の俳優を詠んだ句は多々あり、以て芝居好きが多かつたと同時に、俳優最負も盛んだつたことが思ひやられる、その他舞臺のアラを、或は劇の筋を、或は皮肉を、穿ちを、或は樂屋の内部を、俳優の生活を詠んだのも多い、中に

てれつくてんの頼朝

井戸替へのやうに五郎を引き出し

助六は江戸一番の頭痛持

暫があたまをみんな横につけ

千兩は舞臺に一人しをれて居

は舞臺の氣分で「千兩」をたとへば大星の城渡しの場と見ても可い「暫があたまを」など、何でも無いやうで、活氣横溢の寫生吟である、「井戸替」に至つては、雄渾豪宕、六趣震動と云つた慨がある。

頼朝はてれつくてんで出はいりし

樂屋には頼朝公の部屋は無し

人を馬鹿にするも亦た甚しいかなで「てれつくてん」であらはれて「てれつくてん」で引込むのは五段目の猪ばかりでは無い。

宮芝居百石ほどな工藤が出
宮芝居いかにも曾我が貧に見え

工藤も亦た貧に見えるから面白い。

荒海や浪を着て寢る樂屋番
道具方岩をちぎつて鼻をかみ
頭取が知らせを打つと塀が落ち
八百久が乾物箱は壁にかき
葛の葉はやぶれたとこをよけて書き

と云ふ、以て昔の芝居の大道具のいかなるもので有つたかを想像することが出來る。

昔の芝居の大道具

振袖のむねうちを食ふぬれごと師
耳のわきかき〳〵お七そばへより
祖師堂を先づお七が出吉三が出
勘當は扇でぶつが故實なり

今もかはらない舞臺のしぐさなるかな、だがこれもだん〳〵無くなつて

ワキの僧たばこ盆でもほしく見え
いう〳〵と一ト廻りして急ぎ候ふ

の能樂の舞臺と同じく、骨董品となるであらう。

幽靈はにぎりこぶしで引き戻し
やみ仕合ひそこひのやうな手つきをし
つらの皮うしろへ投げるくろんぼう

これは今も舊劇の舞臺では見ることが出來る、久しいかな、といふべしだ、

若殿になつたを和尚買ふ氣なり
牛若になつた若衆をきゝにやり

はこゝにも芳町がある、男色龍陽の歴史は古い、我國ばかりでは無い、洋の東西、どこにもあることだ、我國だつて、一トたび若き人の、未婚者の世界をのぞけば、……とでも云つて置くか。

前に柳多留初篇で云つたが、江戸兒の神佛に對する信仰……迷信か……に至りては、實に言語に絶して居る、今日に於てすらあの通りである、その昔こそ思ひやるべし。

念佛講死なねば根から損のやう
常念佛さもいやさうな後生也

兩袖をさがして後家は珠數を出し
信心といふは遊山の片身ごろ
代參の胸にぼんなう菩提あり
善人が有るので龜がむごくされ
平内は神と佛のまぎれもの
不動樣縛つて置いて突く工面
代參は道から神と不和に成り
かなふたり其滿ずる夜扉あき
神前でなまものしりの手をたゝき

など勝げて算へるに遑あらずだが、特筆するほど名句も無いから、多くは擧げない「常念佛」「遊山」「かなふたり」は面白い「善人」は有名だがそれまでの句である。

詠史川柳の價値

こゝに特筆しなければならぬのは詠史川柳である、或人は論じて云ふ、詠史は作者が日常生活と無關係な事を題として詠んだものだから、他の川柳のやうに、作者の心もちへぴつたりと合ふわけに行かない、虚僞の句であるから、詩としての價値が無い、と、是れこの詠史川柳が寶暦明和に作られた原由を知らない論だ、嚴密な理窟で云へば、或は古川柳は詩で無いかも知れない、藝術品と云はれないかも知れない、たゞ一箇の秀句であり、金言であり、遊戯文字であるかも知れない、が、それは一家の藝術論であり、文學論である、反對の立場から論ずれば、東西文化の同じからざる所、地球上に棲息する數多の民族が、各自異つた詩を持つて居たことも云はねばならぬが、それを詳細は言はぬことにして、我大和民族の持つ藝術は、……詩は、彼の和歌、連歌、俳句、歌謠、いづれとして詩で無いものは無い、

詩は詩だが淡泊な詩

わが川柳が詩であることは言ふまでも無い、が、それを作るに至る衝動と云つたやうなものが、今日私どもが云つて居る、詩は魂の記錄で無ければならぬ、といふやうな深い詩で無いだけである、已むに已まれぬ感激が迸ばり出たもので無いだけである、たゞ自然に對し、人事に對し、自分の住する社會の雰圍氣に對し、輕い刺激を受け輕い衝動、とまでは行かずとも、心に觸れた感じを、淡泊に言つてのける、一種の律語、だから、多くの場合は、頓智的な概念の披瀝に過ぎない、それは前十餘章に擧げ來つた作物で十分御わかりにならうと思ふ、ところが、それがたゞ心のうはつらを撫でるばかりで無く、ブト不用意に魂の琴線に觸れることがある、其の場合には覺えず、うるはしい高音を上げることもある、それは眞の詩である、りつぱな詩である、古川柳にも、それは時々有る、すなはち不朽の名句と

してのこされる、而して其ひどく魂の琴線に觸れるやうな刺戟は、周圍の社會には、先づ無い、あれば火事、出水、汚吏の暴政、百姓一揆のやうなものだ、それは寶暦、明和、安永、天明の卽ち川柳全盛期にも有つたけれど、殘念なるかなそれを川柳にすることが出來ない、出來たら最期首が無い、といふ時代だ、

役人の骨ッぽいのを猪牙にのせ
さま〳〵に扇をつかふ奉行職

役人の子はにぎ〳〵をよく覺え

といふ句でさへも、削除を命ぜられたといふので、其一班を推知される、百姓一揆はもとよりの事、火事、水害さへも川柳には詠まれて居ない、たゞ平凡なる人事、家庭の葛藤、隣保の問題、士、農、工、商の日常生活、冠婚葬祭の喜怒哀樂、市井の瑣事、戀愛、離別、旅行、遊戯等に輕い

目玉を磨く親仁

刺戟を求むるに過ぎない。

兩眼かつと見ひらいて親仁待ち
人は人なぜ歸らんと親仁云ひ
朝歸り親仁目だまを磨がいて居

遊びぐせのついた息子に對し、大かみなりを下さんとする父、眼鏡を拭いて居るのを「目だまをみがく」は面白い、ところが、其息子たるものなか〳〵、それくらゐで止みさうに無い、といふのは、これを甘やかす母が居る。

出て行けと叱るあとから出やるなよ
このたびは父もとりあえず母のわび
母親を杖の下からだますなり
叱られるたびにむす子の年が知れ

「ぜんたい、おのしはいくつになる、もう二十三といふ年になつて」と
いふところだ、嫁と姑は犬と猿。

御談義も聞きたし嫁もいぢりたし
姑婆いびり過ごして孫をしよい
世間の嫁は手きゝだの柔和だの
かんきんの間嬉しい顔二一つ

息子と嫁と、いちやついて居るのを姑は知らない、そこへ妾なるものが現はれると更に問題を起す。

おめかけのひつぷの勇で河豚を食ひ
おれともに上は五人とめかけ云ひ

下女に至つては、川柳の對照物として第三者にまで知られて居る。

山出しの下女は眞綿とつかみ合ひ
叱られた下女膳立てのにぎやかさ
せきこんで下女口上をのどへつめ

下女と居候と獨者

同じく川柳の對照物とされたものに居候がある、かゝり人とも云ふ。

夜や寒き衣やうすき居候
あみ戸棚内やゆかしき居候
食ふもうし食はぬもつらし居候
湯でもよし飯でもよしとかゝり人
向ふから硯をつかふかゝり人

獨身者なるものあり、同情す可きものなるを、川柳氏はこれを馬鹿にして居る、至つてよろしくない。

屁をひつておかしくも無いひとりもの

かなづちでたび〳〵あけるひとりもの
寢どころをへし折つて置くひとりもの
ほころびと子をとりかへるひとりもの
たまさかに烟を立つるひとりもの

冠婚葬祭の川柳

但し見やうによつては同情ともいへるが、冠婚、葬、祭には

元服の毛うけは母の立まはり
高札の序文のやうな聟をとり
一生の極彩色は嫁入の日
ともらひに行くもうれしき一ト盛り
棚經をかんてうらいに讀んで行き
繼母に涙をかくす魂祭

「元服」も今日では全然そのあとをとゞめて居ない過去の式禮だ、「高札の序文」も亦た今日の人にはわかるまい、忠孝堅く相守る可き事、といふやうなことだらう、「かんてうらい」はてうらかしの意味か、當時の方言として擧げて置く、士、農、工、商には

士農工商の川柳

槍持をはじめて連れてふりかへり
腹を切ることも教へて可愛がり
百姓は金でせかせるものでなし
すみ〳〵で大工をそしる疊さし
明日しめるまでもりつぱな呉服店

「腹を切ること」を子に教へるなど、今人の夢想にも無いこと、川柳氏によりて知ることが出來る、「百姓」の句は、江戸ッ兒の作としては珍らしい農村禮讃だ、地方人が出て、前句の募集に應じたのかも知れないが、この調子はどうしても江戸ッ兒だ、戀愛は遊里吟についで

古川柳氏の唯一資料で、

相性は聞きたし年はかくしたし

いゝ男背骨を膝でこづかれる

すこし名の立つもうれしい若盛り

寢て解けば帶ほど長い物は無し

くどき出す前にしばらく默つてる

有りてさへ況んや後家に於てをや

まる顔のおもながになるはづかしさ

つり鐘を引き卷きさうな長いふみ

まをとこの來べき宵なり酒さかな

嬉しさをとりかへさるゝ鐘の聲

見ぬ顔に惚れる質屋の土用干

だん〳〵にそんならの出る面白さ

戀聟は重き枕へもらはれる

二の膳のやうにめかけの床をとり

じつとして居なとひたいの蚊を殺し

惚藥十日過ぎても沙汰は無し

我首をひよんなところで高く買ひ

「二の膳」「我首」そのころの戀愛生活には、こんなことも有つたらう。「つり鐘」は名句だ、が、それも私どもが或鑑賞眼を以て讀むからさうなので、作者のこゝろもちは何でも無い洒落かも知れない、旅行の句で、

高輪へ出るとわすれたことばかり

くたびれたあとを見て出る鴻の臺

江の島へ口でばかりの連れがふえ

菅笠で犬にも旅のいとま乞

名物を食ふが無筆の道中記

追分はまたをひろげて道を聞き

川越しはとんぼのつるむ氣味があり

兩の手を出して二見の物語り

どうしても、今日の汽車、汽船の世には見られない圖だ、背景に廣重の錦繪がほしい。

其外川柳を透して當時の江戸の社會を見る可きものには、

迷惑なものは祭に牛ばかり

檢校は手引が有つて蛇に怯ぢ

手代にも正札付の呉服店

夜講釋張飛びいきは頬かむり

唐詩選讀むと孔雀の尾がほしい

ついに見ぬもの元年の暦

百兩をほどけば人をしざらせる

千兩は一分かけても氣にかゝり

古錢買またせて鍵（カギ）はどこにある

いくら入りますと質屋はすらり抜き

なぎなたを受けつ流しつ御不勝手

國々のみよしは江戸の方へ向き

かごの衆やこつから聲をかけずによ

もうせんはどこへ敷いても面白い

おしろいを村中さがす宿さがり

社會の各方面を見た川柳

なま壁へ御使者を通す御立身
娘ゆゑ生れもつかぬ武士になり
夜蕎麥賣猪口で手水をかけてやり
火花を散らしたゝき合ふ刀鍛冶
御玄關を淋しく出るは町醫なり
人相見鼻を甚だ賞美する
自身番捨子が泣いて世帶めき
辻番に腰から下の屏風あり
先生達のぶらさがる好い筆屋
具足櫃米櫃よりは邪魔がられ
こそぐつて早く受取る遠眼鏡
印籠の中で目出度く毛を生やし

詠史川柳をかりて憤慨をはらす

私儀紙の四方へ石を置き
歌麿の美人襖で年がより
寢て讀んだ文眞ン中で起き上り

「檢校」は盲人の高官「正札付」はあたまの上に其手代の名「元年の暦」は今もさうだが、改元が頻々と行はれた江戸時代に一層その感が深かつたらう「いくらいります」の質艸は刀「町醫」は抱醫ほどの權式が無かつた「私儀」は大道に物貰ひの啞。

と云ふやうなところを川柳の世界にして居たのだつた、ところで前へ戻つてこの江戸ッ兒の愛好する讀本、講釋より得たる歴史知識は、それを借りて胸中の塊磊を遣るに十分だつた、これを詠史川柳と云ふ。

筆屋へも借りがあらうと時平云ひ

將門はあいそう過ぎて見かぎられ
前九年もとは女房でいりなり
縛り上げ忠盛糠で手を洗ひ
始皇から見れば淸盛小僧なり
九郎殿五常をまもり〳〵逃げ
ふところに抱いて居たのに亡ろぼされ
知盛は喧嘩過ぎての棒をふり
怨靈は消えて源氏の波になり
拜領の頭巾梶原縫ひちゞめ
弓流す日も鎌倉はふところ手
安藝守時ぶんは至極信者なり
夕すゞになると賴政すゝめに來

あくる日はもう鵺の畫圖〳〵
梶原が塀には毒を書きちらし
百石は敵に貰ふた向ふ疵

斯うした風に歷史を借りて、僅かに諷世嘲俗以外に或氣焰を吐いた跡が見える、蓋し詠史川柳が彼等前句附作者には、唯一の獅子鞠だつたのだらう。

尙ほ江戸の社會と川柳の關係を語るには、所謂墮落時代の寬政以後をも逸することは出來ないが、いたづらに惡句をならべて、併せて或は黃金の殿堂のやうに思ふて居る人の有る江戸の社會を辱かしめたくない、併せて江戸時代の川柳を咀ひたくない、こゝで私は曾て私が單行本にまでして出した、新興川柳家に向つて、古川柳にもこんなのがあると擧示した『古川柳眞髓』一千句の中から、左の

最後を飾る古川柳眞髓

十數句を拔いて、最後のページを飾りたいと思ふ。

夜の雪神木までは道がつき

白壁は尋ねる夜の力草

すゝき苅る鎌三日月の見えがくれ

腰張りに昔の夢の影法師

片乳は里子へ響く鐘の聲

國の親手ごたへのある封を切り

惚れられた日は一生の好い天氣

小便に夫婦で起きるにくらしさ

素人になつて昔の恐ろしさ

吹き消せばわが身に戻る影法師

鴛鴦のやうに娘は風に逢ひ

逃げもせぬものをあはてる菌狩

切つた指受け取る時は動くやう

あんな事言つて今時行くものか

良い智恵が出ると日の無い大晦日

うたゝ寢の團扇次第に虫の息

づぶぬれになつて元氣なほとゝぎす

世界の黎明に江戸の螢火

要するに江戸時代の川柳は、特に江戸の物であつた、江戸を研究し、江戸を考證し、江戸を叙述しようとする者、川柳を知らずして、どうして江戸を知ることが出來よう、今日の川柳は東京の物では無い、日本の物或は世界の物かも知れない、世界の黎明は迫つて來た、夜深かりし日本の江戸時代、その一點の螢火が、なほも前途を照らすを見よ。

江戸の二字は川柳に於て光る

飛びのいて高いとこから江戸を見る　劍花坊

天地は動く、人間は動く、今日の社會が昨日の社會で無いやうに明日の藝術は今日の藝術ではあるまい、川柳も、だん〳〵變化してます〳〵良きものとなるであらう、これを吾人に與へてくれた江戸は永久に譽めらる可く、江戸の二字は特に川柳に於てとこしへに光るであらう。

星の座の夜ル夜ル動くすこしづゝ　劍花坊

昭和三年二月十日印刷　昭和三年二月十五日發行

江戸時代の川柳

定價貳圓八拾錢

著作者　井上劍花坊

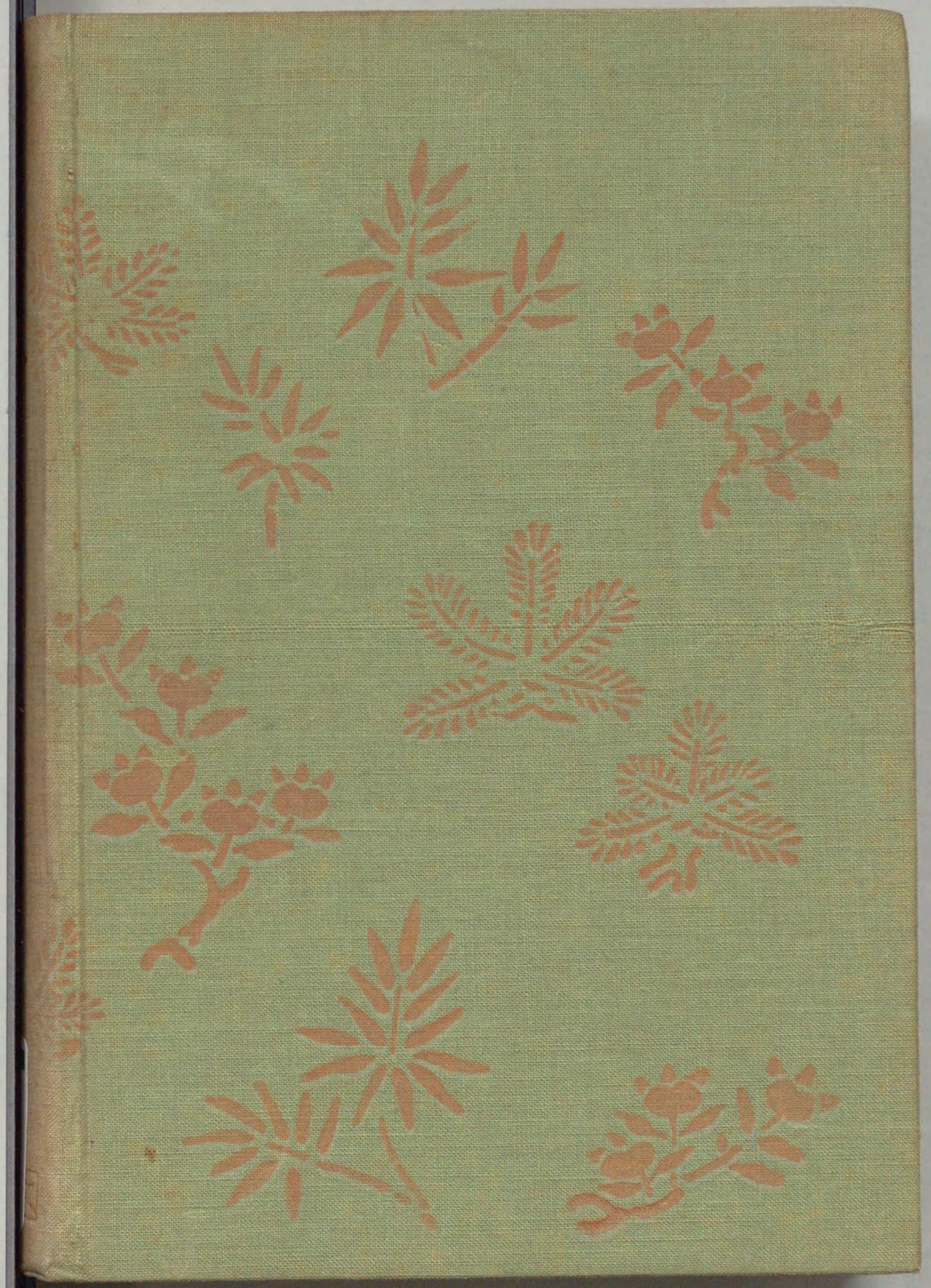
發行者　東京市牛込區赤城元町三十四番地　右代表者　瀬川賴太郎　株式會社文教書院

發行所　東京市牛込區赤城元町三十四番地　近世日本文化史研究會

印刷者　東京市神田區今川小路一丁目一番地　山縣純次

印刷所　東京市神田區今川小路一丁目一番地　山縣製本印刷株式會社

發賣元　東京市牛込區赤城元町三十四番地　株式會社文教書院

關西大賣捌所　大阪市西區阿波堀通四丁目　株式會社大阪寶文館

★★★★★ 版權所有 株式會社文教書院